

文運東漸の一側面

——出版現象面の再整理——

中 野 三 敏

享保以降文運の東漸は著しく、明和安永に至って文学は江戸に定着したと言ひ古された言葉であり、正確な表現である。文学史的には洒落本の発生、読本の展開、八文字屋の板木譲度等の観点から説かれ、文化史的には、学草莽に下れるより輩出した在野文人の活躍といった点から説かれ、政治史的には、吉宗の享保の治、経済・社会史方面からは、貨幣改鑄の影響や、江戸人口の増加等々、既に殆ど説き尽された感があるこの問題を、今は聊か視点を變えて、特に出版現象的な面から、再度の整理を試みたのが此の論である。従つて、書型・板元・刊記等の事柄に言及する事が聊かわずらしい程目につく事と思われるが、論の性格上御許し願ひたい。無論戯作文学を対象とする事は言う迄もなく、又特に江戸板と上方板という事に重点を置いて論を進めて見る。

一 享 保 期

正徳六年（享保元年）京都本屋仲間が三都の先頭をきつて組織された事は、京都の持つ文化的地位を考えた場合当然の事であつたらう。やがて享保六年には江戸、享保八年には大坂と組織は堅

められていくが、これが時の將軍吉宗による一連の商業統制策の一環として行なわれた事は言を俟たぬ。出版機構は、かくして近代化への一步を踏み出すと共に、官権の圧迫を無条件に受け入れる態度を余義なくせられた。享保七年霜月の江戸町触の写しには、好色本、人々家筋先祖の事、権現様の儀等について細かく注意した後

右之趣を以テ自今新作之書物出候共遂吟味可致商売候若右定めに背候ハ、奉行所江可訴出候經數年を相知候共其板元間屋共急度可申付候

と触れる。出版文化に対する政治権力の影響の大きさは今更語る迄もないが、それが明確な形をあらわしたのは、此の時期からであるといつてもさして誤りではあるまい。その度合は次第に嚴密な物となつて行く。ただ、当時の圧迫は何といつても発足当初の事であり、かなり緩やかであつたように類推出来るが、それでも三都の本屋仲間は、上の御施策を遵奉した。娯楽説物の第一人者であつた八文字屋本が、正徳三年の際物・時事小説の禁令、享保七年四度目の好色本禁令等によつて、それ等の要素を順次放棄

	宝歴以前 (24年間)	宝歴以後 (19年間)	全
京坂江不	100	104	204
	42	117	159
	59	151	210
	22	32	54

し、至つて穩健で生ぬるい態の風流読本と化していった事は既に中村幸彦氏の論考に詳しい。その上、これも又吉宗の意図を反映する所大なる教訓本が、仮名草子時代を想起させる様にはなばなく登場して来る。かくして享保以後の戯作出板界は、浮世草子が従来綜合的に持っていた、報導性・好色性・娯楽読物性・教訓性等が独立分化する事になって、実録、奇談、好色本、風流読本、教訓本という構成を示す事になったのは、これも先学の論に既に詳しい所である。

実録は主に写本で行なわれ、好色本は純然たる埒外本となつた事ゆゑ、当面の問題としては、風流読本、奇談、教訓本等を取り上げねばならぬ。まず風流読本から入つて行こう。

正徳に端を発した自笑、其磧の確執も既に一段落し、享保の

計	明和 宝歴年間												宝歴							寛延				
	6	5	4	3	2	1	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	3	2	1	4	
181	6	4	8	5	5	3	7	6	3	4	2	4	5	3	4	6	4	3	2	2	5	3	3	
125	3	9	7	6	6	6	1	7	3	6	1	1	8	6	6	4	2	7	7	3	4	2	3	
111	6	3	4	5	2	3	4	5	3	2	3	3	1	6	6	12	5	8		1				
80	5	9	3		1	2	10	2	1	1	4	5	13	3		4	2			1	1	3		
18					2						1			1		1	1	1		1				
49	1	3			2		1	2	4		1		2		1	1	3	2	2		1		1	
23			1				2	1	1	1	1				1		1	1		2	1	1	1	
20							2		1	3	2	3	3		2			1	2					
11											1	3		2		1		1		2				
9				2			2		2						3									
627	21	28	23	18	16	16	10	21	21	18	17	16	19	32	21	23	29	18	23	14	9	14	7	11
204	6	11	6	2	3	4	3	3	5	5	7	6	6	9	6	6	5	2	6	3	3	4	3	3
159	3	2	7	7	2	7	6	11	9	3	3	3	6	13	4	4	5	4	11	7	1	2	1	5
210	10	13	10	8	5	4	6	7	7	5	4	7	7	10	13	18	10	4	3	3	4	2	2	
54	2	2		1	6	1	1	1		3	2	3		3	1		1	2	2	1	2	4	1	1

八文字屋風流読本は、正に順風満帆の姿、と他所目には見える。しかし時代の波は内外から此の鉄壁をゆさぶっていた。内からは八文字屋本自体のマンネリズムであり、外からは江戸書肆の勢力拡張である。八文字屋のマンネリズムについては、藤岡博士の「近代小説史」以来詳細な論考が多く、ここに付け加へるべき物を持たぬ。ただ前述した通り、数々の禁令によってその現実的性格をすっかり剥奪され、身動き出来なくなった結果のマンネリズムである事だけを指摘しておく。翻って享保十三年より二十年迄八年間の八文字屋本江戸売出しの状況を見るに、全二十八部の内、二三部迄が、江戸万屋清兵衛を売出し所として、前年の暮迄に割印を済まし、正月には京と同時に売出されている。当時既に人口百万を誇る江戸は、京都の板行物にとって絶体の市場であった。恐らくは江戸売出しの際の部数は、御膝元の上方向売し数よりは多かったのではないかとさへ考えられる。此の事は又八文字屋本のみにあらず、他の上方板行物の全てに言える事で、「割印帳」に拠るに、享保十二年より二十一年迄十年間の江戸売出し惣数七〇七部、その内、江戸板三六二部、京板二四八部、大坂板九六部で、同年の大坂での出惣数は一六三部という数字を見れば一目瞭然であろう。そして八文字屋の場合、やがては江戸の売出し店が、売出しだけではなく出版にも関与して来るようになる。即ち元文二年刊の其積作「風流東海硯」は、本来江戸売出し店であった鶴鱗堂鱗形屋孫兵衛が単独で板元となっており、長谷川強氏の「年表」に拠ると寛保頃の八文字屋蔵板目録に、明瞭に「江戸板」と記されているという。但し此の書は明和八年の京都書物問

屋の「禁書目録」に「売買停止」の項にあげられており、又「割印帳」には、元文元年八月十七日の夜一ト晩で吟味する様に命ぜられて五人の行事が一巻づつ分担して吟味した旨が記されている故、何か非常に入り組んだ事情があつての江戸板と見られぬ事もない。しかし此の後、延享元年には「傾城情の手枕」同二年には、「賢女心化粧」等と、単独出版ではないにしても、とに角江戸板元の手の加つた八文字屋本があらはれて来るのである。

かかる江戸板元の勢力伸長の好例が、江戸通三丁目住の文刻堂西村源六にあらはれている。京の書肆にとつて、江戸が絶体の市場である事は前述したが、それ故大手の書肆は殆んどが江戸にその出店を持った事は他の商売の場合と同様である。西村源六も始めは、京六角通り西村市郎右衛門の江戸出店として出発した事は、「竹斎行脚袋」(享保十二年刊)の奥附けに明らかである。京の西村と言へば、天和貞享の頃から大坂の西鶴に対抗して数多くの浮世草紙を書きもし板行もした老舗である。その老舗の江戸出店として発足した文刻堂は、従つてその板行は殆んど京の西村と合板、無論藏板者は京の西村である。その源六は、西村のみでなく、他の数軒の京本屋の売出し所を兼任し次第に商いを伸ばして行く。やがて享保も半ば過ぎると、当時最高の売行きを示したらしい伏斎樗山の「田舎莊子」の成功に目を附け、早速その続編たる「田舎莊子外篇」を板行した辺り仲々の商上手であつたらしい。是を手始めに、源六は俳書類の板行に情を出して次第にその規模を大きくし、享保末年に至ると最初京の西村の藏板だった物迄自家の藏板と為した事が、その藏板目録によつて如実に示され

ている。

江戸板元の成長は以上の例によつても十分に理解出来ようが、當時は既に前述した如くジャンルの分化がかなり激しい時代である。従つて土地柄によつて特意とする出版物が幾分定まつていた様にも見受けられる。まして風流読本はその伝統から言つても上方の独占物としての世評が堅つていたのは当然であり、これは宝歴迄も続いていて「教訓不弁舌」(宝歴四年刊)の言は有名である。

当期風流読本に於ける東西の此の様な關係を如実に物語る物として更に一、二例を挙げておこう。

當時江戸で板行された風流読本の一つに「婚礼名古屋東日記」がある。大本五冊、作者は舞閣とあり、板元は伝通院門前鷹金屋伊平衛と神田三河町池田屋源助の合板、享保十七年春の刊行である。内容は完全な八文字屋本風の芝居物で、享保十六年正月江戸中村座興行の「傾城福引名古屋」のあて込み。八文字屋物の盛行につけ込んで一儲けをたくらんだ物に違いない。ところが、国会図書館蔵の別本には、前記板元二者と並んで「京寺町梅村弥右衛門」の一行が見える。そしてこの行は埋木である事は明らか。即ち再板本であり、京都梅村の手が加はつたのである。更に下つて寛保二年刊の浮世草子「風流返魂香」は大本五冊、作者田中和介大坂白髪町橋町の阿波屋久兵衛板と記すが、何とこれが前記「婚礼名古屋」の板本をそっくり利用し、目録と挿絵のみを新刻した改題再板本なのである。ここに於て、最初江戸で板行された板木が遂に京を経て大坂に迄流れた事が知れる。

更に享保十三年刊行の「面影會我傾城盛衰記」を見るに国会本は江戸万屋清兵衛板、岩崎文庫本は京寺町三条上ル町菊屋安兵衛板となっている。此の書序文には、江戸見物に下つて来た京者が品川の茶屋で江戸者と国自慢になり言い負かされて、では京上りの大谷広次が京での狂言の評判聞とうは御座らぬかと言うに江戸者我を折つて咄せ、という様な次第で江戸人を対象とした作である事は間違いなく、又奥附けの具合から言つて初板が江戸万屋板である事は間違いない。とすれば此の書も再板は京に求板されて菊屋が刊行した事になる。

以上の如く享保中期以降江戸で板行された風流説本が二作共に再板は上方に移つてしまつた事は、前記「教訓不弁舌」の言に照らして考えるに、売行きの点からどうしても京板元の名前が必要であつたという様な事でもあらうか。鴈金屋・池田屋・万屋共に当時江戸では有数の大書肆なのであり、此後も活発に出版活動を続けていたのであるから猶更である。とにかく此処に当時の浮世草子に於る東西の出版界の実情が如実に頭はされていると言える様だと思う。しかし土地柄に拠つて得意とする出版物が定まつて来ていると前述した如く、江戸には江戸独自の戯作類が出来上りつゝあつた。その第一は佚斎樗山によつて口火を切られた教訓説本であり、その二は後年洒落本として成長する遊里戯文であり、その三は俳文に基盤を置く滑稽戯文・狂文である。

教訓本として此迄もてはやされたのは益軒の和訓物や、西川求林斎の庶民心得、辻原元甫の女訓物等があつた。当時歓迎された作品名は、談義本の「教訓雑長持」(宝歴二年刊)や「教訓衆方

規矩」(宝歴十二年刊)に列記してあるが、是等は本来皆な教科書とも言ふべき物が多く、庶民に楽しく抵抗なく読ませる工夫に乏しい。ところが正徳も末になつて、上方で当時名高い神道講釈師増穂残口は「艶道通鑑」六巻を著はした。内容は風流講釈と呼ばれた彼の方法をそのまま生かした物で、庶民の口に合う様に一見恋愛至上主義とでも言える態の物であつた。当時かかる風潮はかなり流行していたらしく、他にも「風流色道訓」(正徳五年刊・半紙本三冊・霞亭文庫蔵)等という恋愛の教科書とでも言う可き内容の物が出ており、作者は「貝信」と、もじつた名前を使つたりして戯作の気味の濃い物である。やがて江戸には吉宗によつて享保の治が始まり庶民教化熱は日増しに高潮して行く。この傾向を素早く察知し乗り出して来たのが、総州関宿久世家の家士といはれる丹羽重郎左衛門事佚斎樗山であつた。その説く所全て「莊子」の「大宗師」を離れず、又説くに莊子の寓言を以てした。寛延迄に江戸に於て出版する著作七部、「天狗芸術論」を除いては、全て庶民を対象とした教訓説本以外の何者でもない。更に江戸には神田白竜子、京には中村三近子等という教導者があらわれているが、中でも白竜子は「典籍作者便覧」に拠るに、「名ハ勝久東武ノ人兵学ニ長ス其学和漢ヲ涉臘シ談論ヲ好マス子弟ヲ教諭ス」——とあつて最も堅物であるらしいが、此の人にしてさえその著「三獣演談」(享保十四年・半紙本三冊)を見るに、頂度その年交趾国から日本に貢献された象が大評判であつたのをあて込み、象・馬・牛の三獣に武辺咄しやその身の効用を述べさせるといふ、目新しい通俗的な手法を用いている。これが克斎主人の

「蛙の物真似」(享保十四年・半紙本四冊)となると、その序文は後の源内の狂文を彷彿とさせ、その本文はさながら宝歴の談義本を読む思いがする。かくの如く正徳末京都に端を発した教訓読本は、享保末迄にはすっかり江戸に定着し、徒らに教訓一方に偏せず、適当に娯楽性を加味して、教科書に非ざる立派な教訓読本として成長したのである。そして享保十七年には京都に「都莊子」(半紙本四冊・信更生著) 寛保三年には大阪に「面影莊子」(半紙本四冊・田中友水子著)と明らかな「田舎莊子」の追隨作を生じさせるに至るのであった。

猶江戸の教訓本には「田舎莊子」の系統とは別に、直接「艶道通鑑」等の跡を襲う神道教訓・神道解説の類も繁栄している。坪内真佐得や八重垣翁といった作者がその代表である。そして前記の「田舎莊子」や「蛙の物真似」等の教訓読本に共通して見られる性格の一つに、概して神道に同情的である事が挙げられる。ここでは先ず蘇我父子の横暴が糾弾され、聖徳太子が批判されると共に、守屋の一本気な忠誠心が見直されるのが常である。唐は唐、天竺は天竺、日本は日本といった国家意識が盛んに強調される。あたかも知識階級の間において、国学思想の勃興は聊く目覚ましくなろうとしている。その時にあたって、庶民の教化を目的としたこれ等教訓読本の世界にもかかる風潮の目覚ましかった事は注意すべき現象であった。又是等教訓読本が一様に持つ性格の第二に「莊子」の応用がある。その寓言と分度論とが、庶民教化の方法と目的に一致したからの事だろうが、翻って国学の世界を見るに、真淵の老子熱は知られた事実であり、国学の体系その物

が老莊に拠る所大なる事も周知の事実である。ここにこれ以上詳述する余裕はないが、とにかく江戸の教訓読本と国学の勃興とは、その基盤とする階級を異にするとは言え、神道と老莊思想をその接点として、かなり密接な関係を持っていた物の如くである事を指摘して置く。

ところで江戸根生いの戯作の第二に、吉原細見・評判記を主軸とする遊里戯文がある。前の教訓読本が將軍吉宗の御膝元という理由で江戸に定着したとすれば、又この遊里戯文も江戸の人口構成の特徴を考えずには把握出来ない。誠に江戸は武士と僧侶とそれ小商人の街であり、それに比例した売色の街でもあった。遊女評判記は元禄末迄は上方でも盛んに出版されているが、以後は殆んど江戸の独占物となったのも偏へに遊里人口の多少のしからしむる所であろう。その上方では享保初、吉宗による強力な肅正政治が施される迄は、所謂三味線物に代表される如き好色読本が盛行を示し、女郎名寄せの如きも、その中に組み込まれて存在していた。即ち遊女評判・遊里細見は、上方では浮世草子の中にすっかり包含されていたのである。これを上方の文学的伝統により説明して、既に上方にては実用性を剥き出しにした細見類は相手にされなかったと説明するのも一面の真はあるが、それよりも遊里その物の規模の大小によるという方がより当を得ている様に思う。吉原の遊女名寄せは万治以来の一枚摺り細見図には当底収容しきれなくなり、ここに吉原細見と呼ばれる横小本型一冊の懷中本が誕生する事になった。所見の最古の物は忍頂寺文庫に収まる推定享保十年板と言われる物だが、雀庵の「吉原細見記考」に拠れば享保

七年の物があるらしい。⁽³⁾ともあれ細見は僅かにその序文に文芸味を聊かのぞかせるのみで他は純然たる実用書であるが、これに対し古風ながらも文芸味を横溢させた遊里戯文が、吉原遊女評判記としてその命脉をつないでいた。そして特に注意すべき事は此の江戸遊女評判記によって、後世洒落本に統一される縦小本型式が生まれた事である。即ち正徳二年初板の「吉原七福神」は、内容は従来の評判記を一步も出る物ではないが、その型式は縦小本五冊という新しい物で、その後「ゑにし染」(正徳三年)「吉原丸鑑」(享保五年)と八文字屋横本の影響を受けたと思はれる横本評判記が続くが、元文に入ると、原雀の「吉原源氏六十帖評判」「傾城つれく草」(兩本共元文二年刊)と何れも縦小本一〜二冊の型で現われる。以後宝歴にも「吉原出世鑑」「吉原交代繁栄記」(兩本共宝歴四年刊)と、元文以降の評判記は全て縦小本型式となったわけで、型式の上で洒落本の祖として評判記を考える事は甚だ妥当性が強い。正徳以前にも、寛文頃から吉原遊女評判記の中には、中本型式で出ている物が多いし、又貞享にも「好色訓蒙図彙」「好色貝合」「人倫糸屑」(各貞享三、四、五年刊)の三部作や「好色通変占」(貞享五年刊・三都板)等何れも縦小本一〜二冊の型で出ているが、是等が皆遊里関係書・好色本の類である事は、縦小本という物がその体裁上洒落でいかにも内容にうってつけだったという事がその主な理由であるだろう。とにかく縦小本型式という物の生い立ちを示して興味深い。今我々は従来洒落本の祖として「両巴扨言」(享保十三年刊)を考え、これを吉原細見の一と考えていたが、内容的にはともかく、外形上から

言えば、細見は既に見て来た如く此の期には横小本一冊という定型が確立している事を考える時、「両巴扨言」が縦小本一冊の型をとったのは、その巻頭に附した漢文体ではあるが遊里戯文の存在を重視して、読み物であるという意識を以て評判記と同型の縦型小本の型式をとったと考えられるのである。

そしてこの「両巴扨言」の上方への影響は実に大きかった。「蟠陽英華」(寛保二年)や「瓢金窟」(延享四年)等の大坂遊里細見は「両巴扨言」なしには考えられないし、京板洒落本「本朝食鑑」(宝歴初年)はその序に「両巴扨言」の名前を引用している。強いて想像すれば、恐らく此の書は享保十八年「合刻両都妓品」と題して巻末に吉原細見と並べて島原細見図を附した時、上方でも売り出されたのではないかと思う。かくして江戸根生いの遊里戯文は、教訓読本の場合と同じく享保以後は上方に大きく影響して正に文運東漸の逆を行く事になるのである。しかし特にこの遊里戯文の場合その成長発展は殆んど上方の土壌に於いて成しとげられた。この事はやはり上方の持つ文化的伝統を抜きにしては考えられない事で、ややもすると教訓と実用の前文学的傾向に陥りがちな江戸と違って、たとえ細見にせよこれを実用品の儘で出版する事は彼等の趣味性がそれを許さなかった。その結果「両巴扨言」等はその戯文性を主に受けつがれる事になり全く洒落本として完成する他、細見類も「みをつくし」「一目千軒」(兩本共宝歴七年初板・横本一冊)等、板元八文字屋・作者季秀という八文字屋のコンビによって推察される通り、実用細見というよりは読ませる本としての注意を十二分に行き届かせている。「浪

華青樓志」(宝歴九年刊・紙小本一冊)も全く是に倣っており、特に此の書は「本草校要」(宝歴四年・中本二冊)「会海通篇」(宝歴年間カ・小本一冊)等と共にその板下造本等実に入念な仕立てになっており、到底この期の江戸板の真似の出来ぬ物を示している。

かくの如く、享保期に於ける江戸の出版界は浮世草子の世界にも僅かに進展を見せたものの、教訓読本と細見評判記という特徴を以て立つ所大であった。これは頂度江戸初期、文芸界の黎明期に於いて、仮名草子が教訓性と実用性を第一の要素として生長した事と全くよく似ている。思えば享保期は江戸の文芸界にとってまさにその黎明期に当る時である。そうした時期にまず教訓本と細見の類に得意を示した事は文学史の当然の成り行きだったと言えるかも知れない。ともあれ享保という時代は、京阪出版界の絶体優位の内にも、江戸には江戸らしい戯作が出現して、その地盤を着々と堅めつつあった時代であると言える。

二 元文寛延期

此の期は全体的に見て、それほど飛躍のあった年ではなく、いはば前代に生じた諸々の芽が序々に伸びはじめた時期とも言えるようか。中でも八文字屋の消長は印象的である。即ち元文元年に其磧の死を見たと思う間もなく、延享二年には大黒柱の自笑が八十有余で歿し、すぐ跡を追う様に、寛延三年には其磧の後陣となつた南嶺と、自笑の跡目をついだ其笑とがそれぞれ八月、九月と月を追って死んでいったのである。此の間僅か十五年、内容がマ

ンネリズムの上に、作者や企画者たる板元に人を得ないのでは、動きがとれぬのは当然で、ここに八文字屋の命運は既に定まつたと見てよい。一方江戸板の方はこの期にはさしたる動きはないが、是迄事に京都に頭を押えられて来た大坂の板元と共に次代の目覚しい発展に備えて、序々にその内容を充実させていた事は勿論である。かかる板元の穏やかな動きと比べて、当代の読書界は仲々動的な様相を見せている。享保以来知識階級の間では東西を通じて白話小説の講説が流行を見ていた事は先学の説に詳しい。八文字屋本のマンネリズムに聊か飽き飽きしていた知識層の読書子は正に旱天の滋雨の如くに、この小説味豊かな舶来文学に飛びついたらしい。儒医都賀庭鐘は元文延享間に三十篇の小説を書いたという。白話小説講説に拠る成果の第一の物であった。これが寛延二年「英草紙」となつて現われた物である事は言う迄もない。それ迄にも所謂怪談奇談は出版されてはいる物の、上方板は殆んどが浮世草子系の物か、又は井沢蟠竜子の「新古事談」「新統古事談」(元文二年刊・半紙五冊)の如き説話集であり、江戸板は摩志田好話の「御伽空穂猿」(元文五年・半紙五冊)に拠つて口火をきられた教訓奇譚で数も極く僅かである。やはり怪談奇談の盛行は東西共に「英草子」以後宝暦を待たねばならぬ。それよりも庶民層の間で急速な伸びを見せ始めたのが、やはり読本の祖としての地位を与へられている「仏教勸化物」の類であつたらしい。例として元文五年刊の大坂板「女人愛執怪異録」の序文を引用しよう。此の書は「大蛇解脱物語」(享保十八年刊・半紙本二冊・江戸)等と同系の至つて通俗的な読み物で、「信田

白狐伝」や「安部仲麿入唐記」(両本共宝歴七年刊・大本四冊江戸)等の勅化物とは聊か趣きを異にする書であるが、内容の詳細は「選訳古書解題」にゆづつて、その序は著者臨水軒伝阿の自序で京師獅子谷の僧或時孝感の奇持を書たる草案と愛執の報応を記せる漢文とを携へ来て言浄業のいとま訂正し玉へかしと我つらく是を見るに古今の珍事なり此故に日課のいとまに固陋をかえり見ず書綴りて一本は考感冥祥録と名て彼僧方へ遣しけれへ京師書林沢田氏乞請て板行しけるに都鄙の人思ひの外にもてはやし今に至てハ老万余部摺出せるとかや——

と言う。序文としての誇張はあるとしても万更の嘘でない事は、この「考感冥祥録」なる書名が「愛執怪異録」と並んで確かに「宝歴書籍目録」の「仏書雑部」の項に出てているのを見るし、又書林沢田氏とは風月堂沢田一斎か、智音院古門前の沢田吉左衛門か、とにかく当時実在の書林名である事は間違いないからである。仮名草子時代に「清水物語」が二三千部を売り尽したと言はれている事から見れば、此の数字は一応の信をおけそうで、一万部の書物が売れる体勢になった事は出版史上、非常に大きな事と言えよう。

かくの如く当期の説書界は知識・庶民両階級にわたつて誠に盛況を極めていた物の様に思はれるが、前に江戸独特の出版物の第三として挙げた、「狂文」の発展も又此の時期に當る。

その基盤となつたのは、「風俗文選」系の俳文である事は確實で、上方の作品は「淡々文集」(寛保二年・森三楊・大本五冊)「風狂文章」(延享二年・田中友水子・大本五冊)「狂歌不断笑」

(寛延三年・竹田楚竹・半紙二冊)等と、後になるに従つて次第に狂文的性格は強くなるものの、俳文としての格を乱す所迄はいっていない。しかるに江戸板のそれは享保の「風俗遊仙窟」(享保十七年・寸木主人克斉・半紙四冊)以来、延享の自堕落先生事山崎北華の諸作に至ると全くの狂文と言ふべき内容を持つ様になつてゐる。自堕落先生は既に春水によつて、江戸滑稽本の祖としての地位を与えられてゐるのであるが、この両者をつなぐ線の延長上に宝歴の平賀源内を置いて考える事は全く妥当だと思はれる。寸木主人克斉の伝は不明で、ただ「宝歴書目」に「安部正禧」という名前が出てゐる事が知れるだけだが、その著は前述した「蛙の物真似」と共に、当時としては非常にこなれた面白い物となつてゐる。自堕落先生の場合はその著「風俗文集」の巻頭に自ら詳しい家系と伝を掲げており、又南畝も彼にはかなり関心を持ったと見えて、「仮名世説」「四方のあか」「金曾木」等とその伝や逸話を記している。それ等に拠ると自堕落先生は江戸の武門の生れであり、五度主を替え終に浪人して無思庵・捨榮斎・確連坊・不量軒等と号し、俳諧に遊んで髪を唐輪に結ひ諸国を遊歴したが元文四年冬谷中の養福寺にて戯に柩を作りその中に入つて自らの葬儀をなし、その後は「後の北華」と称して文筆にいそしみ「風俗文集」(延享元年・半紙二冊・後「風俗文選拾遺」と改題)や「続奥の細道蝶の遊」(延享二年・半紙三冊)等の俳文集、「勞四狂」(延享三年・半紙二冊)なる随想等を出板し、又予告だけでも八部の書名が「風俗文集」巻一の末に記されている。その思想は「勞四狂」について見るに老荘的隱逸の性格が強いが、相当な

奇癖の持主であつた事はその伝によつてもよくわかるし、又當時からその点では有名だつたと見えて、安永五年の序を持つ黄表紙

「花鳥確蓮房」⁽¹⁰⁾は全篇彼の伝を以て趣向となしている。彼の狂文は五度び主を替へ終に浪人したという事によつて推察される如く、自意識過剰なインテリ下級武士としての性格から出た物と理解される。一例を示すに〈読婦去来辞〉と題して、

淵明よく五斗の米に繋がれず、故郷に帰り天命を楽しむと、淵明元来金持成るべし。ふる里に田地有りて食に足り、僕僕妻子を養ひ、酒も樽に満ちたりと、如此ならば誰れか仕官を望まん、今の士淵明にまさる志有りと、官を捨てゝは食すべき田地もなく、口過の芸能もなく、いやな事も世渡り^{たはは}戯気^{たはは}に手をつき、腑ぬけにつくばふ、誰れかこゝろよしとせん――

(風俗文集)

源内との相似もこの点にある事が理解されると思う。やはり此等の狂文も江戸という武家中心の社会でなければならぬ知的な産物であつた。此の傾向は克斉の著作にもやはり見られる所であるが、やがて寛延元年には志道軒の「元無草」(半紙本一冊)の如き狂文を加へ、翌二年には「風俗遊仙窟」の再板を見て、江戸板はここに狂文・滑稽戯文という後代に伸びる芽を又一つ定着させたわけであつた。

とにかく、前述の通り、次期に於ける文芸界の飛躍の基礎は内容面に於てもすっかり堅められ、又その需要面に於いても「愛執怪異録」の序が示す如く、読書子は野に満ちて、新機運の勃興はまさに必至であつた。

三 宝 歴 明 和 期

かくして宝歴期に入るや、「表I」に示した通り、戯作出版の数は驚威的な増加を見せる。特に江戸・大阪は約三倍に膨れあがつた。とはいへ京都の出版が急に淋しくなつたというのではない。京板は元通り或いはそれ以上に板行されているのであり、漸く大阪・江戸が京と肩を並べ、やがてはそれを抜き去る迄に伸びて来たという状態であつて、三都共に出版活動は全くの盛況を示すのである。享保期に於ける江戸・西村源六の発展を前述したが、大坂では「英草紙」の出版等で名高い柏原屋洪川称觥堂が、その店舗敷地の拡張に於いて、宝歴八・九年の間にその坪数を激増し、順慶町五丁目⁽¹¹⁾に於いて有数の大商賈となつた事を、佐古慶三氏の最近の論考により詳しく知る事が出来る。

享保・寛延の東西書肆の状況を眺めて来た今、この結果は当然の事とも言えるが、しかし聊か異常である。そこで外部的な要因を探つて見ると、宝歴元年六月二十日の吉宗の死が大きく浮び上る。吉宗は延享二年に將軍職を辞し隠居したが、在職中は周知の通りの活躍でへ上の御教奇な物、御鷹狩と下の難義^{なんぎ}等という評判を取つた人物である。たとえ職を離れたとはいへ、生きていたというだけで十分睨みが利いていた事であらう。その彼の死が公布された時、人々は公方様の死を一樣に悼むと共に、内心の解放感は大きかつたに違いない。此の解放感が出版界に作用せぬ筈はないと考える。俄然戯作類の出版部数は高騰した。そして是は單に部数の増加にとどまらず、その内容にも大きく影響したと思は

れる。即ち、宝歴初頭、前代の教訓読本を更に通俗化した洛陽沙弥静観房の「教訓下手談義」（宝歴二年刊・半紙五冊）によつて口火を切られ、大流行を見せる面白おかしい江戸の教訓談義が、次第に肝心の教訓を離れて好色談義、粹説法へと移行して行くのがその端的な頭はれと言えよう。是等好色談義の先頭を切つたのは、有名な「跣婦人伝」（半紙三冊）である。幕臣山岡明阿弥の作と伝へられる此の書は、成立は当代には非ず、前期の寛延二年には序・跋迄揃えているのであるが、その出版は宝歴三年になっている。続いて宝歴四年には、「当世花街談義」（孤舟作・半紙五冊）が出て、此処から本格的な好色談義が始まるのであるが、実は此の「花街談義」は現在岩瀬文庫に収まる「白増譜言経」の改作本なのである。此の書は余り知られていない故聊か詳しく説明して置く。半紙型写本一冊、全七十三丁、序・跋共に具備し、跋には「寛保四甲子仲春下八」の年記あり、内題の次に「皇倭本端俳師仲夷治郎 奉詔訳」とした署名を持つ。その体裁の整っている事から稿本かと思はれるが、刊本の存在を聞かぬ。勿論江戸の作で、内容は経文の十八品に擬した全くの色談義・粹説法である。目録と序文の最初を引用して見よう。

巻一 序品第一、傾城利欲真実地色品第二、止観金持品第三。

巻二 諸物現徳品第四、安樂世界譬喻品第五、獄中罪人妓有鬼

呵責品第六、金言授記品第七。――

序文の方は

願人坊かいはく地藏殿の禪をしちに置く答曰なかな／＼我是を聞ておもへらく頭をそりし法師の身にてかくのこしく成

ることをいふハなんととも仏の事をさへいへば後の世は助ると知て一心すこし悟道らしく成りし時黄なる衣を着たる天童黄巻紫軸の巻物を取り来れり――

と、すっかり戯文調の板についた物である。「花街談義」はその頭尾に当時流行の志道軒と談義本の趣向を上手く取り入れただけで、後は適当に「譜言経」の内容を改作して一篇をなした物であった。

享保初年、八文字屋が法令を遵奉してこの手の好色本の板行を遠慮する気配を見せて以来、此の内容で、半紙本型式で大びらに板行されたのは、恐らく「跣婦人伝」と此の「花街談義」の二書を以て始とするであろう。猶大坂では延享三年に島之内の廓遊びを描いた「月花余情」の初板が半紙本一冊の型で出た事が「享保以来大坂出版書籍目録」所収の「売買差留目録」に拠つて知れるが、是れは出版と同時に絶板処分を受け、矢張り宝歴に持ち越して、八年に至つて小本型式で再板された事は周知の事実である。

要するに是等好色戯文三作は、共に寛保・寛延の間に出来上りながら、一は絶板となり、他は刊行されず年を経て、宝歴に至つてやっと板行された所に、吉宗の死による時勢の移り行きを知る手係りがあると思うのである。

ともあれ以後再び遊里文学を含めた当代文芸の開化期が訪れる事になるが、この時期の出版界の最も特異な現象として、ここに異板の続出という事を指摘する事が出来る。此の場合異板というのは、内容は同じで、板下を完全に違え、字句・挿絵等を幾分改刻・新刻した様な物を意味するのだが、勿論これは板権の点から

言つて、同一板元でない限り違法行為である事は当然である。

とに角此処でその異板類を列記した「表Ⅱ」を見て戴き度い。

表Ⅱ

	原 板	異 板
(一)	<p>「月花余情」(延享三年刊 半紙本一冊 大坂)</p> <p>○「享保以来大坂出版書籍目録」所収の「売買差留目録」による。</p> <p>○板本所在不明</p>	<p>「同 書」(宝歴八年刊か? 小本一冊 大坂)</p> <p>○無刊記、無署名</p> <p>○序(二丁)題言(半丁)江南妓昌記(四丁半)燕善篇(十三丁)秘戯篇(一丁)以上全三十一丁</p> <p>○流布本也</p>
(二)	<p>「華里通商考」(延享五年刊 小本一冊 江戸)</p> <p>○「延享五_辰春考訂 散人」とあり</p> <p>○全七丁</p> <p>(大東急文庫)</p>	<p>「魂胆惣勘定」(宝歴四年刊 半紙本三冊 江戸)</p> <p>○「石嶋政植題」</p> <p>○此の書の附録として「華里通商考」を半紙本型四丁半に改刻して附す(蘭牛齋述)と記す。</p> <p>○奥附「東都書房 本町四丁目 中村治平衛梓」</p>
(三)	<p>「風姿紀文」(宝歴三年刊 半紙本三冊 江戸)</p> <p>○「江都 竹径蟻局述」</p> <p>○一種の俳文集なれど、巻三の後半に「戯作」として「菜種寄異見状」と「国名寄夫妻喧嘩」の二作を附す。</p>	<p>「青楼叢書」(宝歴十二年序 小本一冊 大坂)</p> <p>○「宝歴十二年晚秋 浪華桂井酒人序」</p> <p>○「序、小序」(六丁)建業余話(十三丁半)奥附(半丁)「勘当数」(二丁)「菜種寄異見状」(六丁半)「国尽女夫喧嘩」(二丁半)以上全三十一丁</p> <p>○「建業余話」は単独で出版されている(宝歴書目「小説」の部) (天 理)</p>
(四)	<p>「本草 妓要」(宝歴四年刊 中本二冊 京?)</p> <p>○「巫山 陽腎男 選定」</p> <p>○上巻「叙」(二丁)「第二叙」(二丁)凡例、目録、附図(四丁)「本草妓要本文」(十丁)「漂遊総義」(十丁)</p>	<p>「大通 伝」(安永六年刊 小本一冊 江戸)</p> <p>○序に「安永丁卯之春正月 文章不知之道人高慢齋」と記す</p> <p>○原板「漂遊総義」上の改変</p>

<p>○下巻「序」(三丁)「漂遊惣義」(十二丁) ○上巻「漂遊総義」は和文の遊興心得のヶ条書き也 ○京、竹苞楼板か</p>	<p>(四) 「陽臺遺編」(宝歴七年刊か 小本一冊 大坂) ○題簽 陽臺遺編 全 (東大國語研究室本) 姍閣秘言 (大東急記念文庫本) ○見開きに「月花余情後編、猷笑閣藏」と記す ○序者 猷笑閣主人 ○「序」(二丁)「江南妓邑図」(一丁半) 艶詩(三丁半) 題言(五丁) 秘戯篇(十三丁) 姍閣秘言(十五丁) 全四十一丁 ○「秘戯篇」と「姍閣秘言」は明らかに板下が異なる。但し「姍閣秘言」の「又四」の丁のみ「秘戯篇」と同じ。</p>	<p>(六) (一)の異本と (四)の原板</p>	<p>(七) 「新月花余情」(宝歴七年刊か 小本一冊 大坂) ○「宝歴丁丑正月吉日 斗梅堂主人羽張天序」</p>
<p>○序(一丁半)口絵(一丁)目録(一丁半)本文(十七丁半)以上全三十二丁半 (加賀文庫)</p>	<p>「同 書」(刊年不明 小本一冊) ○無刊記、無署名、題簽、所見本三本共に欠 ○序(二丁) 秘戯篇(十二丁) 妓家編(二丁半) 粧房篇(九丁半) 以上全三十四丁 ○序は同じ、本文は殆んど同じなるも幾分語句を改めて改板 ○「姍閣秘言」という内題を取り去り、章題も「置屋の段」を「妓家篇」に「身仕廻部屋の段」を「粧房篇」に変へ原本の「浜の京屋身揚げ之段」を取り去る。 ○板下は原板よりも綺麗 (天 理)</p>	<p>「月花余情」(刊年不明 小本一冊 江戸か?) ○題簽欠、故に書名は見返しに拠る。 ○見返しに「風鈴先生泥郎着述 月花余情」と記す。 ○「序」(二丁)「題言」(一丁)「江南妓邑記」(六丁)「燕喜篇」(十二丁)「秘戯篇」(九丁)「自楽篇」(七丁)「陽台遺編序」(二丁) 全三十八丁 ○宝歴板「月花余情」「陽台遺篇」を適当に改刻し、挿絵をつけた物、言葉が江戸風に改められている。場所は原のまま。(忍頂寺文庫)</p>	<p>「酔たる左登能花」(刊年不明 小本一冊 大坂か) ○「いぬの文月・随鷗しする」と序にあり</p>

<p>○「序」(二丁)「本文」(十三丁)</p>	<p>(凡)</p> <p>「廓中奇譚」(明和六年刊 小本一冊 江戸)</p> <p>○奥附に「明和六年丑十二月 日本橋通三丁目本屋吉兵衛」</p> <p>○見返しに「白岡先生著 書榮堂」</p> <p>○「序」(二丁)「船窓笑話」(五丁)「弄花卮言」(十六丁)</p> <p>「掃臭夜話」(四丁)「秋」(一丁) 以上全二十八丁(以上早大、天理、国会等)</p> <p>○「弄花卮言」の初めの挿絵の周囲を墨でつぶし「仁兵之顔」と詞書を彫り入れた物あり。(国立博物館本)</p>	<p>(ハ)</p> <p>「大平楽府」(明和六年刊 中本一冊 京都)</p> <p>○見返しに「銅脉先生著 書肆長才房藏」と記す</p> <p>○跋に「桑津食楽」と署名す</p> <p>○「序」(二丁)「序」(四丁) 卷一本文(五丁) 卷二本文(四丁) 卷三本文(九丁) 跋(二丁) 奥附(半丁) 以上全二十六丁半</p> <p>○「長才房」は巻末の蔵板目録により、京寺町佐々木竹苞楼なる事が知れる。</p>
<p>○「序」(一丁半)「口絵」(一丁)「燕喜篇」(三十三丁半) 以上三十六丁</p> <p>○宝歴板「月花余情」「陽台遺篇」「新月花余情」の板木を部分的にその儘使用し、絵を新刻して文章のつながる様に改刻した物。</p> <p>○挿絵や、角書き等から寛政頃の刊か。(加賀文庫)</p>	<p>「同 書」(刊年不明 中本一冊 大坂か)</p> <p>○無刊記、無署名、所見本四本共題簽欠</p> <p>○「序」(二丁)「弄花卮言」(二十二丁)「掃臭夜話」(二丁) 以上全二十七丁</p> <p>○内容は地名、人名、詞書等すっかり大坂風に改変してある。「弄花卮言」は全く別種といつていいほど異同が激しい。挿絵を削る。(以上加賀・大東急本)</p> <p>○「掃臭夜話」を「掃臭夜帖」と刻した物あり(霞亭文庫本)</p>	<p>「同 書」(明和六年序 小本一冊 江戸カ)</p> <p>○見返し文面は原本と同一なるも板下は違う。</p> <p>○跋文無し、奥附無し</p> <p>○「序」(三丁)「序」(三丁) 本文卷一(四丁半) 本文卷二(三丁半) 本文卷三(八丁) 以上全三十二丁</p> <p>○柱記並びに小本の体裁から言つて竹苞楼板とは思えない。江戸板の狂詩集と酷似する。跋を削る。(国立博物館本)</p> <p>○「第二序」の「明和己丑八月北山業寂僧都序」とある所を削った物あり。(松浦博物館本)</p>

<p>(什)</p> <p>「遊郭擲錢考」(明和二年カ 小本一冊 大坂)</p> <p>○序に「菊大朗自序 乙酉卯月」と記す。</p> <p>○奥附「浪華笑華堂藏」と記す。</p> <p>○「序」(二丁)「凡例」(二丁半) 目録(二丁半) 本文(三十二丁)「跋」(二丁)「奥附」(半丁) 以上全三十九丁</p> <p>(岩瀬文庫本)</p>	<p>(出)</p> <p>「辰巳之園」(明和七年刊 小本一冊 江戸)</p> <p>○序末に「明和七庚夷林鐘撰之 槽閑街紫樓」とあり。</p> <p>○巻末に「夢中山人寝言先生著」とある。</p> <p>○「序」(二丁半)「口絵」(半丁)「自序」(三丁)「本文」(二十八丁)「通言」(三丁) 以上全三十六丁</p>
<p>「擲錢青樓占」(安永三年 小本一冊 江戸)</p> <p>○見返しに「金比羅山人著 書肆二本房藏」とあり。</p> <p>○奥附に「安永甲午秋九月發行 江戸本石町十軒店 崎金兵衛(他京坂書肆四名)」</p> <p>○「序」(二丁)「凡例」(二丁半)「目録」(二丁半)「本文」(三十二丁)「口上」(二丁)「跋」(二丁) 以上全三十九丁</p> <p>○内容は言葉つきや名詞を江戸風に変えてある。</p> <p>○板式は此方の方がはるかに整い綺麗である。</p>	<p>「同書」(安永二年刊 小本一冊 江戸)</p> <p>○序末、上記の文の後に「安永二癸巳年再板」とあり。</p> <p>○奥附に「若町方道南側三軒日本屋八左衛門、同清七板」とある。</p> <p>○「叙」(二丁半)「口絵」(半丁)「自序」(二丁半)「本文」(二十丁半)「通言」(二丁半)「奥附」(半丁) 以上全二十八丁</p> <p>○用字のみを違え内容は全く同じ。(日比谷 忍頂寺本等)</p> <p>○寛政年間、多田屋利兵衛の再板あり。(加賀、天理等)</p>

その刊年・板元・刊行地等の推定については一一詳しい説明が必要なのであるが、紙数の関係で無理なので、便宜上表にした物である。此の十一例の内一、三、六、八、十一の五例は既に中村氏や森銑三氏によって報告された物であり、新たに六例を加えたのがこの表である。

ここに現はれた異板類に共通の特徴は、第一に殆んど全てが縦小本型式である事、第二に宝暦末より明和に集中している事、第三に文運東漸という言葉から推量される様な上方――江戸間の一方交通ではなく、適当に交流の型を採っている事等である。一については半紙本から小本へ、小本から半紙本へといった例は一、

二あるが、半紙本から半紙本へといった場合は一例も見出せなかつた。此の事は小本型式が異板を作るのに手間がかからず便利だという事もあるが、より本質的には、何よりもそれだけ取締りの目が厳しくなかつたという事に帰着すると思はれる。宝歴七年には本屋仲間の三都組合が結成されたのも、第一の目的は、類板・重板・異板を防ぎ取締る為の手段だった事は言う迄もなく、「京阪書籍商史」を見れば、漸く活版化した享保以来の出板活動の陰で本屋達がいかに此の問題で頭を悩ましたかは容易に理解出来る。半紙本・大本の世界では類板・異板は大変厳しく取締られてゐる事は実例を挙げる迄も無い事であろう。因みに「割印帳」には所謂洒落本滑稽本類の小本は殆んど記載されず、又「大坂書籍目録」にも初期の例は「瓢金窟」「聖遊廊」「遊客年々考」位の物である。これによつて従来小本類は別に地本問屋辺りの統制があつたのではないかとの推察が生まれていたが、これほど異板が続出してゐる所を見ると、統制機関の存在は到底考えられないのである。若し統制が為されたとしても、それは安永も末の頃からであつたろう。それに数は少ないにしても一応前記三本の例が「大坂書目」に見られる以上は小本類だけの本屋仲間が別に存在したとはどうしても言い切れない。ともあれ此の宝歴・明和期の小本の世界は、悪く言えば野放しの状態であり、何かと法令に拠る圧迫の多かつた当時としては珍らしく自由な世界だったと言はねばならぬ。

縦小本型式の歴史は既に享保期の所で略述したが、それは要するに遊里戯文の世界に於いて成長・発展したものであつた。そし

て今や宝歴期に入ると前述した如く吉宗の死によつて一度に開放感が訪れ遊里文学が半紙本の世界にも再興して来た。伝統的に遊里文学の中に育ち、又多くの異板が示す様に半紙本の世界とは比較にならぬ程自由な小本の世界である。忽ちの中に数多くの板行を見たのは当然で、中には「三国独合点」「逸歌国字解」「胸註千字文」等のように破札がかつた物迄とび出す仕末であつた。ここに於て内外共に小本型式が確立したと言える。かかる自由さは當時の、文芸を己が慰さみと心得る素人作家達にとつては、どれ程魅力だったかわからない。特に一応四民の上に立つ武家の文芸志望者にとつて、一小うるさい検閲のある半紙本の世界よりは何の気兼ねもない小本界の方が住み良かった事は当然である。かくしてインテリ武士を中心とする素人作家群が小本界に誕生した。これは上方も江戸も殆んど同時ではあつたが、やはり何と言つても文芸伝統の上で大人と子供ほどの違いのある両地の事故、その発展は暫く上方に任ざられていたのも無理はない。しかし、元文以来教訓読本や実用書に着々とその地盤を堅めて来た江戸文芸界は、学問の卑俗化と共に武家作家が現はれるようになる。そして宝歴も末になると三都の文芸界は「表I」に示した如く、単に現象的に見ても、明らかに実力伯中といった状況を現出して、相互に影響し合い競争しあう事になつて、ここに第三の特徴として掲げた文運交流時代が興つたのである。異板ではないが、「妬婦人伝」の模倣作が「色道このてかしは」（写本・半紙一冊）「感妬醉裡」（半紙三冊）と宝歴十一年になつて京・阪同時にあらはれた事等は、

最も良くその事情を物語っていると言へる。

大体異板が出るのは、作者の貧困時代と相場が決まっているが、この宝歴・明和期は傑出した作家はいないにしても、その数に於いては決して貧困とは言えぬ。ただ余りに急激な発展を遂げた為、作家の方でそれについて行けなかったという事はあるが、決局一番大きな理由は、それだけ小本類がもてはやされたという事に尽きると思う。試みに「表Ⅰ」の宝歴七年と十三年を採ってみても、浮世草子の31種・奇談怪談の28種、教訓談義の21種に対し、それ迄数的に到底太刀打出来なかった洒落本が36種と一躍首位に躍り出ている事は良い例証となろう。

かかる状態の内に、明和に入ると、江戸では下級武士を中心とした同好者の集りが目立って来る。東江・源内・南畝・南条山人・娛息斎・東作等といった顔触れがその有力な者であるが、以後益々その交流は広く深くなり、やがて完全な戯作文壇が出来上るのである。その結果戯作という言葉の持つ意味迄が違った物となったが、今はそれにふれる余裕はない。ともかくこれ以後は前代の芽生えを順調に発展させて江戸に於ける文芸はその地歩を完璧に堅めてしまった。

享保に於ける京板元の盛況と、その裏にある衰退の兆し、江戸板元勢力の伸張は、元文以後、八文字屋の急激な衰退と読書界の興隆とによって、聊く三都鼎立の状況を示し、更に統出する異板に示される様な交流現象を経て明和末に至って江戸文壇の成立を見、その文運東漸運動を終るとするのが、一応図式的にも納得出

来る展開といへるだろう。

（異板・再板等の問題では鈴木重三氏、浜田義一郎博士の御指教に拠る所大である。附記して感謝致します。）

註Ⅰ（此本（風流本）にも限らぬ惣たいこんな事は江戸ものは埒不明ぬ——こんな本に江戸の作はすくない。みな京誓願寺下ル町八文字屋が板で、京作じや）

2（夫から段々仕上げて六論衍義大意、同小意とて中村氏が作甚よいものじや——貝原の書は下手談義にさへすめてある。——其外町人袋百姓袋冥加訓の類、分量記の前

二篇——女子には女大学大和小学女子訓の類——年かさな娘共には列女伝女四書がよし又壺の石碑といふ本と比売鑑は殊によりしい物じや——又小夜衣とてずんと耳近ひ貞女の噂を書いた物がある——）（教訓難長持）

「衆方規矩」の方も殆ど重複する。但此方には単朴や静観房の作品等を掲げてある所が目新しい。

3（予が記する所の七部の書外題異なりといへども始終みな一意にして全体田舎莊子なり、其語る所逍遙遊・齊物論・人間生に過ず、その物に托するは寓言なり、神仏を仮るものは重言なり、その戯談は危言なり、衆口に調和して他の情を慰するといへども皆太宗師をはなれず——）（雑

篇田舎莊子 卷六）

4。「傾城色三味線」（元禄十四年）に

島原——308人、新町——652人、吉原——1750人

。「諸国茶傾呂白」(宝永頃)に

島原—304人、新町—589人、吉原—2067人

。「寛延雜秘録」(未刊隨筆百種卷十)に「寛保三亥年江戸人別改の事」に、「新吉原男女八千六百七十九人、外二遊女子女共三千九百五人」

5 小野晋氏の御指教に拠ると元禄三年刊の横小本型吉原名寄評判があるそうで、横小本型細見の最古の物か。又忍頂寺文庫の享保十年板なる物は鱗形屋板であるが、享保年中の細見板元は湯嶋相模屋・人形町ひらのや・大伝馬町鶴屋・新吉原三文字屋等であり、鶴鱗堂鱗形屋は大体元文期から細見に手を出している様なので、果たして享保十年板か否か不明確である。又細見の堅小本型式は「両巴扨言」シリーズを除いて、安永迄の所見本は、国会図書館蔵の元文五年鱗形屋板(「吉原けんぶつ左衛門」か)を見るのみであり、又東華の「吉原細見年表」には「浮舟草」享保二十年板と寛保三年板「恋の湊」の二本を記すのみである。

紹介

佐々木八郎著

『平家物語評講』

これまで『平家物語』の註釈書は数多く世に出てはいるが、全巻を通釈したもののはほとんどない。本書は『平家物語』全十二巻を上下二冊に分けて、これに「口

訳・「摘解」を施し各章段ごとに詳密な「評説」を試みたもので、この種の著述中もっとも完備した体系と内容とを示している。ことに「評説」は著者のもっとも力を注がれた部分で、この作品の背景となった当時の諸記録を普く渉獵し、史実とその文学化の経緯を克明に解説されたもの。『平家物語』の読みとり方を論じられた巻頭の

「構造と意味」とともに、著者の多年にわたる『平家』研究の成果がそこに結集されているといつてよい。なお本書の底本には、今日もっとも普及度の高いと思われる覚一別本(岩波文庫)が使用されており、教材研究用としてもきわめて便利である。(上巻、七九七頁。定価二五〇〇円、下巻、八月上旬発行。明治書院。)

6 霞亭文庫蔵の「瓢金窟」には初丁に式亭三馬の識語あり

「ひさしく箱の中にすておきたりしを文化九年三月中旬表装を補ふこれは江戸の両巴扨言に倣て浪花にて編たるもの也」と。

7 石崎又造「近世日本に於ける支那俗語文学史」

②中村幸彦「読本の発生」「古義堂の小説家達」

③宗政五十緒「享保・元文期・京都における唐話通たち」等。

8 中村幸彦「読本の発生」

9 「牛島土産」(文政七年刊)の春水の序に「滑稽地に隨て戯作者欄へあげられ風来の塵吹飛で、自墮楽の奇章紙魚の巢にならんとせしを、式亭三馬再び浮世にもて遊ばせ」

10 大東急文庫蔵本・浜田博士御指教に拠る。

11 「上方文化」第五号「淡川称觥堂伝」

12 中村幸彦「洒落本の発生」

森銃三「古書新説」